

ナントカ学

お茶が病気の治療に役立つなど、いろいろか。

静岡県掛川市の市立総合病院 副院長の鞍馬庸一さん(58)は7年前、同病院に赴任が決まった時、「こんなことを考えた」

茶(TEA)の産地静岡県知立町(現南九州市)の生まれ、専門は消化器内科で、C型慢性肝炎の治療に力を入れてきた。

掛川は茶(TEA)の産地静岡県の中で最も有数の茶生産地だ。病院の目の前にも茶畑が広がっている。鞍馬さんは、緑茶のカテキンなどの成分に「抗酸化作用」があることは知っていた。

C型肝炎の患者は肝臓が鉄を過剰に蓄積してしまう。鉄が酸化して、体が「きびけい」(ニキビ)を緑茶が防いでくれるのではないかと、という発想だった。

お茶の葉には水に溶けない有効な成分がある。静岡県に長く住む医師の助言もあって、葉を粉末にした。02年1月から、C型肝炎患者に100%の緑茶粉末を1日3回、計6g(お茶約20杯分に相当)を飲んでもらっている。通常の治療との併用治療で効果を検証している。

使う緑茶は100%約5000円では入れている高級品だ。地元茶商組合から仕入れる。患者の男性(58)は「じわりと効いている感じがする」と言う。

「本格的な研究が必要だ」という声におかれ、病院は05年、「緑茶医療研究センター」を作った。緑茶の医療効果を研究する公立病院初の施設だ。

センター長になった鞍馬さんは「メタボリックシンドローム

「緑茶で一息」が体に効く？

(内臓脂肪症候群)の改善に力を入れたい」と話す。緑茶の成分には糖や脂質の代謝をよくする効果があると言われる。C型肝炎患者2人に緑茶粉末を1カ月間飲んでもらったところ、メタボ防止に役立つ糖玉ホルモン「アディポネクチン」の血中濃度が平均20%向上したという。

肥満とともに現代人を悩ます花粉症対策にもお茶は注目されている。「入心(ふろしき)」という、元は紅茶向けの品種だ。

4年ほど前、農業・食品産業技術総合研究機構の山本万里さん(47)たちは、抗アレルギー物質のメチル化カテキンを含む緑茶が花粉症を軽減する可能性をみつけた。中でも、べにふうきの緑茶が効果的だった。

見向きもされなかった品種だ。だが、3年前に緑茶ドリンクとして発売され、ヨーグルトや入浴剤、スキンケアと新商品が次々と誕生している。

健康志向にのって改めて注目されるお茶。鞍馬さんは「お茶を飲めば癒やされるし、他人とコミュニケーションを取る道具にもなる。これら効果も相まって、体に効くのではないのか」と言う。

緑茶で一息、仲間や家族と一緒にお茶をいたたく、長寿日本の原風景かもしれない。

文・中野沙

写真・山谷勉

